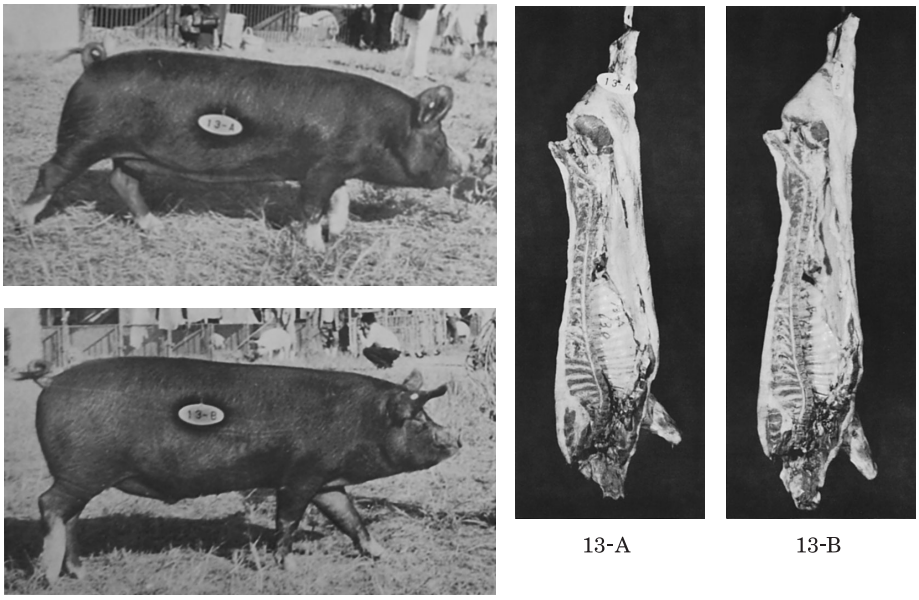


図 11.9　第 6 回肉豚共，優等賞，第 2 類（B 種）13 号豚の生体と屠体
（鹿児島県，鮫島誠三氏出品）

9-1-8. 第 7 回（昭和 47 年，1972 年，3 月）

①第 1 部 Y 種豚の出品は，第 1 類（未経産）8 頭，第 2 類（経産，繁殖能力登録豚，以下同じ）8 頭，第 3 類（壮齢雄）7 頭，計 23 頭（出品県 6 県）であった。飼育頭数の減少にもかかわらず体型，資質の優れた種豚が出品され，中ヨークシャー種豚の基礎がなお確固たるものであることが実証された点心強く感じられた。

②第 2 部 B 種豚の出品は，第 1 類（雌，未経産，経産）4 頭，第 2 類（壮齢雄）1 頭，計 5 頭で，出品県も 1 県（鹿児島）であったが，出品豚はよくバークシャー種の特徴をあらわし，少数とはいえバークシャー種豚資源の健在が示されたことは喜ばしい次第であった。

③第 3 部 L 種豚の出品は，1 道 1 都 1 府 39 県にわたり，第 1 類（未経産）44 頭，第 2 類（経産）51 頭，第 3 類（若齢雄）36 頭，第 4 類（壮齢雄）27 頭，計 158 頭であった。出品頭数が最も多かったにもかかわらず，各類を通じて体型，資質ともにおおむね斉一し，雌豚のみならず雄豚においても優れた種豚が多くみられ，ランドレース輸入開始以来 12 年にして，わが国ランドレースの資質もほぼ固まったものと考えられた。

名誉賞最上位の高松宮杯は第 4 類（壮齢雄）の 169 号豚（秋田県，佐藤　功氏出品，図 11.10）に授与された。

④第 4 部 W 種豚の出品は 7 県で，第 1 類（未経産）6 頭，第 2 類（経産）4 頭，第 3 類（壮齢雄）7 頭，計 17 頭であった。

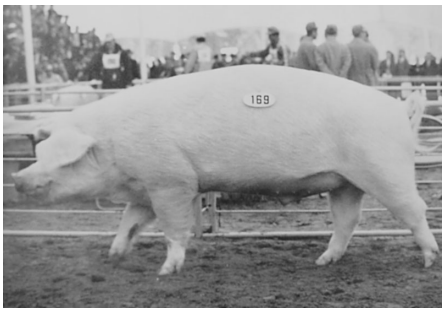


図 11. 10　第 7 回名誉賞（高松宮杯），ランドレース種，種豚 169 号豚
（秋田県，佐藤　功氏出品）

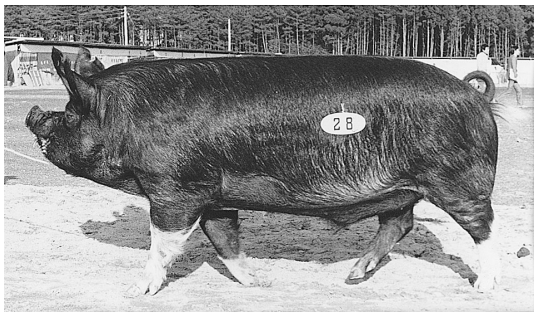


図 11. 11　第 7 回名誉賞，バークシャー種，
種豚 28 号豚
（鹿児島県，森　繁雄氏出品）

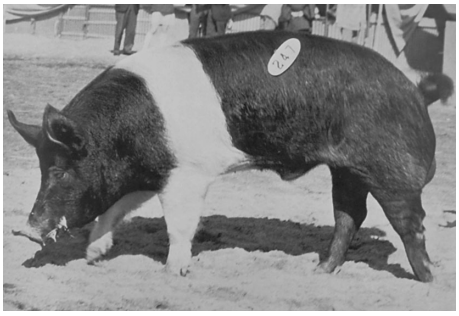


図 11. 12　第 7 回名誉賞，ハンプシャー種，
種豚 247 号豚
（茨城県，矢吹省一氏出品）

⑤第 5 部 H 種豚の出品は 1 道 18 県で，第 1 類（未経産）24 頭，第 2 類（経産）10 頭，第 3 類（若齢雄）9 頭，第 4 類（壮齢雄）9 頭，計 52 頭であった。両部（両品種）とも今回が初めての出品であった関係上，出品豚の体型にもやや異なるものがあったが，概して発育もよく，適切な出品であった。

⑥第 6 部母娘群の出品は 1 道 13 県で，L 種 13 組（39 頭），B 種 1 組（3 頭），計 14 組（42 頭）であった。困難な出品部類にもかかわらず，系統的な豚改良の重要性がよく認識され，出品豚の選定も適切であり，母娘間の遺伝的特質をよくあらわしているものが多く見受けられた。

9-1-9. 第 8 回（昭和 51 年，1976 年，10 月）

今回の出品はつぎの 5 部に区分された。

第 1 部未経産（出品頭数 83 頭），第 2 部経産（出品頭数 55 頭），第 3 部若齢雄（出品頭数 51 頭），第 4 部壮齢雄（出品頭数 64 頭），第 5 部親子群（出品頭数 23 組，92 頭）。これを品種別にみると，L 種が最も多く（216 頭），ついで W 種（44 頭），H 種（42 頭），D 種（30 頭），B 種

(13 頭)，計 345 頭で，今回から新たに D 種が加わったが，いっぽう頭数の激減した Y 種の出品がみられず，一抹の寂しさを感じた。

品種別概評としては，B 種は出品頭数が少なかったが全般的に良好であり，とくに雌に良好なものがあった。この品種は全国的に減少しているが，すぐれた種豚の維持，改良に努力されている出品者，関係者に敬意を表する。L 種は全般的にレベルが向上し，地域差が少なくなった。発育がよく，体積もあり，良好であったが，体（とくに下腹部）のゆるいものが多かった。W 種はよく揃っており，良好であった。体積，体高もあり，大型種の特徴を備えたものが多かったが，一部に体の伸び不十分なものが見られた。H 種は大体揃っていたが，胴の伸び不十分なものがあった。若雄に 1，2 よいものが見受けられたが，全般的には雌よりも雄の方がやや見劣りがした。D 種は今回はじめての出品であり，頭数も少なかったが割合良好であった。親子群では全般的に母豚よりも娘豚がよく，改良の効果が明らかであった。と体審査豚（同腹の雌子豚と去勢豚各 1 頭）の成績も大体良好であった。この部の出品は条件がむずかしく困難であり，出品者のご努力に敬意を表した。

名誉賞（高松宮杯）受賞の親子群 19 組（W 種，静岡県小松　薫氏出品）は，各部を通じて最も傑出しており，母豚，娘豚ともに資質が優れ，体積に富み，体高もあり，肢蹄も丈夫で，品位に富んだ優秀な種豚であった。と体審査豚は雌豚，去勢豚ともに，背脂肪が均一に，適度に沈着し，ロース芯も太く，肉量に富むすぐれた枝肉であった。

今回の出品豚を通覧して，日本の豚はもはや世界的水準にあり，決して諸外国に劣らないとの印象を深くした。

9-1-10．第 9 回（昭和 55 年，1980 年，11 月）

今回は全国 41 都道府県からわが国を代表する 348 頭の種豚が出品され，次の 5 部に分類されていた。

① 第 1 部（未経産）: 第 1 類（生後 10 カ月以上 11 カ月未満のもの）の出品は 38 頭で，全般的によく揃い，体型，資質ともに地域別の差が少なく，前回に比べて水準の向上が見られた。第 2 類（生後 11 カ月以上 12 カ月未満のもの）の出品は 49 頭で全般的に第 1 類よりすぐれ，かなり良いものが多く見受けられた。

② 第 2 部（経産）: 第 1 類（生後 12 カ月以上 16 カ月未満のもの）の出品は 8 頭で，全般に発育，体積，均称のよいものが多かったが，一部に下腿の充実，肢蹄に難のあるものが見受けられた。第 2 類（生後 16 カ月以上 22 カ月未満のもの）の出品は 26 頭，第 3 類（生後 22 カ月以上 30 カ月未満のもの）の出品は 28 頭で，ともに体積に富み，一部に欠点はあるものの立派な種豚が多く，とくに第 2 類は第 2 部の中で最もよく揃っていた。

③ 第 3 部（若齢雄）: 第 1 類（生後 10 カ月以上 12 カ月未満のもの）の出品は 11 頭で，第 2 類

（生後 12 カ月以上 14 カ月未満のもの）の出品は 28 頭であった。ともに発育良好で，体のしまりもよく良好であったが，一部に性相の欠けるものや下腿の充実に難のあるものがあった。

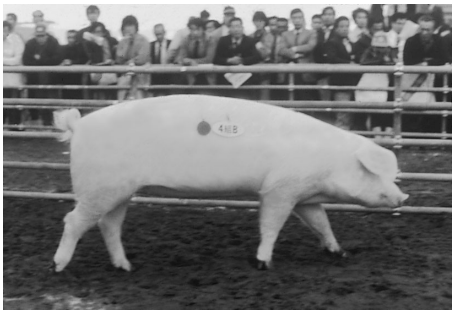
④第 4 部（壮齢雄）：第 1 類（生後 14 カ月以上 20 カ月未満のもの）の出品は 34 頭で，体型，資質とも概ね良好で揃っていたが，特に傑出したものがなかった。第 2 類（生後 20 カ月以上 30 カ月未満のもの）の出品は 30 頭で，体積に富み，体に伸び，深みもあり，均称も良好で，全般に成績良好であったが，一部に体のしまりに欠けるもの，肢蹄に難のあるものなどが見受けられた。

⑤第 5 部（親子群）：今回から母豚 1 頭，同娘豚 3 頭（同腹豚）計 4 頭を 1 組とする困難な出品条件となったにもかかわらず 4 品種（B 種，L 種，W 種，D 種）計 24 組（96 頭）の出品があり，すぐれた成績であったことは喜ばしい次第であった。

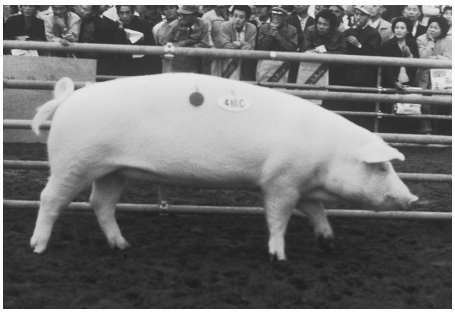
各群に 1 点ずつの名誉賞があったが，最上位の高松宮杯受賞は親子群の第 4 組（L 種，茨城県，染谷　豊氏出品，図 11.13）で，母・子ともによくランドレース種の特徴をそなえ立派なものであった。

母豚

娘豚 A



娘豚 B



娘豚 C

図 11. 13　第 9 回名誉賞（高松宮杯）受賞の親子群，第 4 組（ランドレース種）
（茨城県，染谷　豊氏出品）

9-1-11．第 10 回（昭和 59 年，1984 年，10 月）

今回の出品は全国 39 都道府県から 371 頭のすぐれた種豚が出品され，出品頭数は過去最多であった。審査は第 1 区（個体）と第 2 区（親子群）に分けて実施された。

第 1 区（個体）

①1 部（B 種）：この部の出品は 2 県で，その出品頭数は第 1 類（未経産）3 頭，第 2 類（経産）

図 11. 14　第 10 回名誉賞受賞の親子群，第 3 組の母豚（バークシャー種）
（鹿児島県，渡辺近男氏出品）

図 11. 15　第 10 回名誉賞受賞の親子群，第 40 組（デュロック種）
（静岡県，佐野光信氏出品）

2 頭，第 3 類（若齢雄）1 頭，第 4 類（壮齢雄）3 頭，計 9 頭であった。バークシャー種はわが国でも伝統的な品種であり，飼育頭数が少ないにもかかわらず，よく純粋種の維持・改良につとめられ，優秀なものが出品されたことは喜ばしく，とくに第 2 類（経産）と第 4 類（壮齢雄）において優れたものが認められた。

②第 2 部（L 種）：この部の出品は 1 都 1 道 1 府 31 県にわたり，その出品頭数は第 1 類 52 頭，第 2 類 26 頭，第 3 類 18 頭，第 4 類 24 頭，計 120 頭で，第 1 区（個体出品）中最も出品頭数が多かった。一部に若干の欠点は認められたが，全般的に資質がすぐれ，優秀なものが多数出品された。とくに新しい養豚県においてすぐれた多くの出品が見られたことは，わが国ランドレースの改良水準が向上した証左として喜ばしい次第であった。

③第 3 部（W 種）：この部の出品は 1 道 17 県で，その出品頭数は第 1 類 14 頭，第 2 類 10 頭，第 3 類 8 頭，第 4 類 9 頭，計 41 頭であった。各類を通じ発育がよく，体型もととのい，立派な種豚が多かったが，一部に過大なもの，体のゆるいもの，頭頸部の重いものなどが見受けられた。

④第 4 部（H 種）：この部の出品は 7 県で，出品頭数は第 1 類 2 頭，第 2 類 2 頭，第 3 類 3 頭，第 4 類 4 頭，計 11 頭であった。本種は飼育頭数の減少傾向を反映してか，出品頭数も少なく，全般的に資質の向上も緩慢で，とくに傑出したものがなく，上位のものを除き前回に比べていささか物足りなさが感じられ，今後の改良進歩に期待した。

⑤第 5 部（D 種）：この部の出品は 1 道 10 県で，出品頭数は第 1 類 8 頭，第 2 類 3 頭，第 3 類 10 頭，第 4 類 9 頭，計 30 頭であった。各類を通じ概ね月齢相当の体積を備え，発育も良好で，体型，資質ともに優良なものが認められたが，全般に過肥の嫌いがあり，とくに種雄豚においては過大なものがあったので，育成管理に留意を要望した。

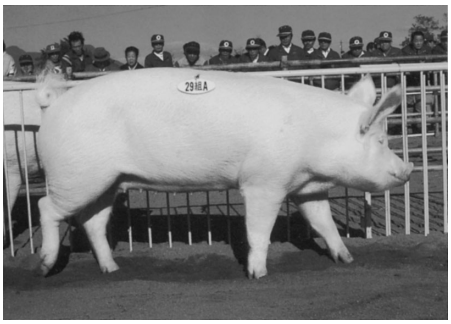
第 2 区　親子群

親子群の出品は 1 都 1 道 23 県で，品種別には B 種 3 組，L 種 24 組，W 種 6 組，H 種 2 組，D 種 5 組，計 40 組（160 頭）であった。親子群は母 1，子 3（雌 2，雄 1 で同腹のもの）をもって 1 組とする困難な出品条件にもかかわらず，すぐれた多くの親子群が出品されたことは，まことに喜ばしい次第であった。

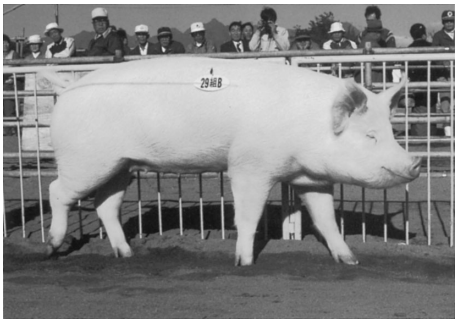
出品は品種的に一部のものにかたよってはいたが，各品種ともよくその特徴を備え，とくに上位のものは母，子ともに体型，資質が優秀であり，母子間の相似・改良度，娘同志の斉度も良好であった。ただ，一部のものに親子の遺伝的似通いについて不十分なものがあり，適当な種雄豚の選定と交配関係について今後の研究が必要と思われた。

以上の第 1 区個体の各部および第 2 区親子群の 5 品種に各 1 点の名誉賞が授与されたが，最高位のグランド・チャンピオン（高松宮杯受賞豚）には，親子群の第 29 組（W 種，群馬県，吉

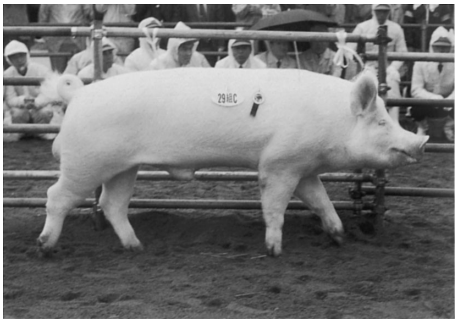
母豚



娘豚 A



娘豚 B



きょうだいの雄豚 C

図 11. 16　第 10 回名誉賞（高松宮杯）受賞の親子群，第 29 組（大ヨークシャー種）
（群馬県，吉田小夜子さん出品）

田小夜子さん出品，図 11.16）が選ばれた。この第 29 組の親子群は，母，子ともに月齢相当の発育を示し，体型もよく大ヨークシャー種の特徴をあらわし，きわめて優秀な親子群であった。とくに母子の相似・改良度と娘相互の斉度にすぐれ，また娘豚ときょうだいの雄（息）豚もよく性相をあらわし，資質のすぐれた種雄豚であった。

9-2. 入賞区分と上位入賞豚

第 1 回から第 10 回までの出品豚の入賞区分と，上位入賞豚（出品者）を表示すると表 11.8 のようである。

上位入賞豚を地域別にみると，種豚の部においては，中ヨークシャー種（Y 種）とバークシャー種（B 種）の出品のみであった第 4 回までは，Y 種は当時，種豚生産の先進地であった関東地域とくに神奈川県が首位を占め，いわゆる神奈川ヨーク（中ヨークシャー）の面目躍如たるものがあった。次いで群馬，千葉，埼玉，愛知，静岡の各県が優良豚を生産していたことが明らかである。

バークシャー種（B 種）は，鹿児島県が出品頭数が多かった上に，体型・資質ともにすぐれた優秀豚が多く，その優位は第 10 回まで連続して保たれていた。埼玉県がこれに次いで良好で

あった。

ランドレース（L 種）の出品は，第 5 回共進会からで，全国各県から出品されたが，関東，東海地域とくに神奈川，静岡，茨城，千葉等からの出品に良好なものが見受けられた。これは Y 種飼育の先進地であったこれら諸県のすぐれた種豚飼育技術が，当初大型種の飼育に多少の戸惑いはあったものの，いち早く熟練した飼育技術が L 種にも適用された結果のあらわれと思われる。わが国に輸入された L 種は，スウェーデン，オランダ，イギリス，デンマークさらにアメリカ等各国にまたがっており，それぞれの特色が見られたが，共進会を重ねる毎に次第にわが国 L 種としての理想の体型に収れん（斂）されてきた。またわが国 L 種の飼育普及の歴史の中で神奈川県の有名なブリーダーであった二見一雄氏の系統（オランダ国のアデュデント系など）からすぐれた L 種豚が多く輩出し，一時は全国出品豚の 7 割近くが二見氏の系統に関係があるとまでいわれ，一時代を画しわが国 L 種豚の普及に少なからぬ影響を与えた。

L 種については，第 10 回に至って九州勢（熊本県ほか）の台頭が目立ち，将来が大いに期待されたが，その後開催中止となり残念であった。

大ヨークシャー（W 種）については輸入国によって欧州系（とくに英国系）と米国系とがあり体型にもやや違いがあったが，種豚家によって適宜選抜，交配が加えられ，小松　薫氏（静岡）や吉田小夜子氏（群馬）らの出品に見られるような立派な豚が生産され，次第に本種の真価が認められ着実に普及し，国際的水準のすぐれたものが出品されるようになった。

ハンプシャー種（H 種）やデュロック種（D 種）は L 種や W 種に比べると輸入後の歴史も浅く，L 種や W 種ほど高水準のものはなかった。両種とも花開くのはこれからと期待されたときに第 10 回共進会は終わった。

肉豚の部においては，第 1 回～第 5 回に鹿児島，静岡，埼玉の B 種，千葉，神奈川，群馬等の Y 種にすぐれたものが出品され，とくに B 種で鮫島誠三氏（鹿児島）の出品豚が名誉賞 2 回，優等賞 2 回に輝き，Y 種で伊藤寛吉氏（千葉）の出品豚が名誉賞，優等賞各 1 回の立派な成績をあげられた努力には敬意を表した。第 6 回肉豚共進会では，初めて雑種豚が出品されたが，上位（金賞および銀賞）入賞の品種の組合せは LH（♀×♂）が最も多く，ついで HL，BL，LW，YL 等であった（この時点では未だ D 種は輸入されておらず，現在最も一般的に利用されている三元交雑（LW・D など）はなかった）。

なお，第 6 回肉豚共進会において，第 1 回以来の連続出品者である鹿児島県加世田市，鮫島誠三氏に表彰状と賞品が贈られた。

表 11. 8　入賞区分と上位入賞豚出品者（敬称略）

	種豚					肉豚				
	名誉賞	優等賞	1等賞	2等賞	3等賞	名誉賞	優等賞	1等賞	2等賞	3等賞
第 1 回	Y 佐野忠作（神奈川）	7（Y7）	15	32	48	—	3（Y2 B1）	7	15	16
第 2 回	Y 小山源之丞（神奈川）	9（Y8 B1）	20	40	60	Y 伊藤寛吉（千葉）	2（B2）	7	15	25
第 3 回	Y 村田留吉（神奈川）	9（Y8 B1）	20	40	64	B 鮫島誠三（鹿児島）	2（B1 Y1）	7	15	22
第 4 回	Y 斉藤角蔵（群馬）	11（Y9 B2）	23	45	68	Y 加藤利雄（茨城）	3（B2 Y1）	8	14	26
第 5 回	Y 高橋四郎※（群馬）	23（Y16 B2 L5）	46	67	90	B 鮫島誠三（鹿児島）	5（Y2 B1 L2）	14	22	29
第 6 回 種豚	Y 五十嵐義康（群馬） B 斉藤愛作（埼玉） L 二見一雄※（神奈川）	23（Y10 B1 L12）	80	145						
	母娘群	（金賞）6 組（Y3 B2 L1）	（銀賞）6 組（Y4 L2）							
第 6 回 肉豚						第 1 部（純粋種）	15 組（Y2 B1 L10 H2）	24 組	36 組	
						第 2 部（雑種）	（金賞）5 組	（銀賞）27 組		
第 7 回	Y 高島伝次郎（茨城） B 森繁雄（鹿児島） L 佐藤功※（秋田） W ㈱埼玉種牧（埼玉） H 矢吹省一（茨城）	22（Y2 L15 W1 H4）	78	150						
	母娘群 L 二見雄作（栃木）	（金賞）4 組（L4）	（銀賞）9 組（L8 B1）							
第 8 回	第 1 部未経産 L 永田一夫（静岡）	（金賞）25	（銀賞）25	（銅賞）23						
	第 2 部経産 W 増田弘（静岡）	17	17	21						
	第 3 部若齢雄 L 渡辺昭一（茨城）	15	15	21						

	種豚					肉豚				
	名誉賞	優等賞	1等賞	2等賞	3等賞	名誉賞	優等賞	1等賞	2等賞	3等賞
第 8 回	第 4 部壮齢雄 L 衣鳩幸蔵 （千葉）	19	19	26						
	第 5 部親子群 W 小松　薫※ （静岡）	9 組	8 組	6 組						
第 9 回	第 1 部未経産 L 粟野玄茂 （茨城）	26	27	33						
	第 2 部経産 L 斉藤忠男 （千葉）	18	19	24						
	第 3 部若齢雄 W 矢部栄次 （三重）	11	12	15						
	第 4 部壮齢雄 W 吉田小夜子 （群馬）	18	19	26						
	第 5 部親子群 L 染谷　豊※ （茨城）	7 組	8 組	8 組						
第 10 回	（第 1 区個体） 第 1 部 B 種 有水俊一 （鹿児島）	2	3	3						
	第 2 部 L 種 迫　栄一 （熊本）	35	36	48						
	第 3 部 W 種 小見貞一 （群馬）	12	13	15						
	第 4 部 H 種 幸田征夫 （茨城）	2	3	5						
	第 5 部 D 種 小林秀明 （群馬）	8 組	9 組	12 組						
	（第 2 区親子群） B 渡辺近男 （鹿児島）									
	L 染谷　豊 （茨城）									
	W 吉田小夜子※ （群馬）									
	H 須藤歌雄 （群馬）									
	D 佐野光信 （静岡）									

註：※印は高松宮杯受賞者（表 11.10 参照）